

旧集落で観光協会をつくって 台湾と独自の海外交流

平戸の中野観光協会の取り組み

尾崎 正利

(よかネットNO.38 1999.3, NO.41 1999.9)

- 1 観光・サービス産業

九州の西の端にある平戸市は、県庁所在地の長崎市から車で2時間、佐世保市から1時間、福岡市から3時間かかる場所にある。つまり日常的に有力なマーケットとなる母都市が近くにない地域である。

ここで地域づくりのお手伝いをしている中で、面白い話を耳にすることができた。全市を代表する観光協会とは別に、30年前に合併した旧集落で独自の観光協会が、固有のテーマで世界的な人や地域のネットワークを築く活動をしているという。

歴史的には近所の国と広域な海洋交流圏を形成していた平戸

平戸の歴史をみると、日本の海外交流の歴史において中世の交易の拠点としてかなり栄えた時期がある。交流の中心は明や宋を相手に「貿易」の形をとっていたこともあるが、明国沿岸部で倭寇

として恐れられた海賊活動に、松浦地域から参加していた人々も多数いたといわれる（倭寇の正体については諸説あり、倭人だけでなく明国沿岸部の流賊も日本式に武装し参加していたと伝えられ、数的には圧倒的に多かったという説もある）。平戸は海洋民族としての独自の広域な地域交流圏を形成していた。

梅棹忠夫先生の著書「世界史と私」（NHKブックス）では、当時の東アジアの海洋交流エリアの地図が紹介されているが、日本国ではどうやら平戸が有力な窓口であったらしい（地図参照）。

平戸は長崎と並んで、様々な国と付き合いしてきた歴史をもつが、オランダやイギリスとの関係は期間的に短く、およそ30年くらいであり、その前から海を挟んだお隣さんと付き合いしてきた歴史の方が密度も濃いものである。

2000年以降は何で食っていくのか？平戸はどこで付き合うのか

長崎県では今、2000年を目途に日蘭修好400年を記念して、全県を挙げていろいろなシンポジウムや、観光拠点整備事業が進められているようだが、地元の様々な人に「平戸はこれからずっとオランダで食っていくのですか？」と聞いてみると、はっきりした返事は返ってこない。

平戸というのはこれだけ西にある地域だから、常に人に見てもらおう状況をマメにつくらないと、イベントだけでは客が継続的に呼べないし、第一、地元がそんな体質に馴れっこになるのはよくない、ということに触れたとき、市の職員が「市の中野地区（合併前の中野村）に中野観光協会があり『鄭氏宗親会』という、鄭成功を今なお慕っている人達の世界のネットワークの活動をサポートしている」と言った。

聞いてみると、手弁当で台湾からのお客さんを招いては盛んに交流し、こちらからも毎年台湾に出かけていっては会の親交を広げるようなことを



アジアの中の平戸

やっている。英雄「鄭成功」の映画まで作ろうとしている。早速紹介してもらった。

中世の東洋の英雄・鄭成功は、平戸の女性を母親にもっていた

ここで鄭成功について少し触れたい。鄭成功は、鄭芝龍（16世紀に明と平戸の交易を行っていた海上勢力の頭目であったという）と平戸の女性・田川マツとの間に生まれた子で、日本名は福松で、父に伴われて明で成人した。

当時、明国は新興勢力の清に攻略されて滅亡の危機にあり、明国の王は、武勲の誉れが高い鄭成功に国の王室の「朱」姓を授けた。ちなみにこの「国の姓を授かった大人」を日本で紹介したのが近松門左衛門の原作である浄瑠璃「国性爺合戦」である。鄭成功は明滅亡後にも明国復興運動を続け、アモイを中心に沿岸部で清と戦い大いに悩ませ、のちに台湾に渡って、当時台湾を支配していたオランダ軍を追い払うなど、中世の東洋が生んだ英雄の一人といってもいい。先立ってTBS系のテレビ番組「世界ふしぎ発見」で、鄭成功の生涯が放映されていた。番組では台湾と平戸の双方でロケをやっていたが、台湾における鄭成功の人気のすごさを見て、あらためて驚いた。

しかし現在、平戸で鄭成功のことを知ろうとしても困難である。唯一、市内の川内という地区の海岸の一角に「鄭成功児誕生石」というものが残っている。母親の田川マツが散策中ににわか産気を催し、その石にしがみついで出産したという逸話も残っている。

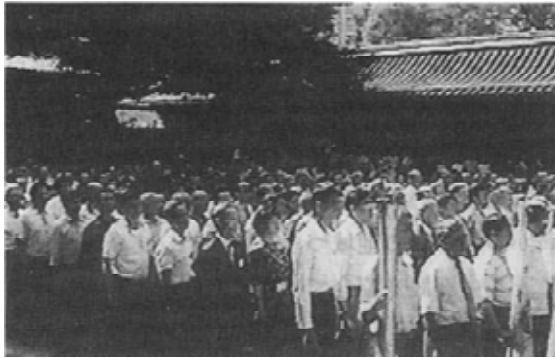
また、川内には鄭成功廟という廟堂が作られており、川内の入り江を見おろすことができる。しかし、東洋の中世の英雄の出生地ということが地域として自慢されている感じではない。

独自のネットワークをつくって海外と交流する観光協会があった

中野観光協会のメンバーで、「鄭氏宗親会」の平

戸側の中心的な役割を勤めている方を訪ねてみた。石田康臣さんという方で、お仕事は川内郵便局長を勤めておられる。仕事が終わった後、無理をいってご自宅にお邪魔して、中野観光協会のことや、鄭氏宗親会のこと、世界的なネットワーク活動などについてお話をうかがってみた。以下はその概略。

- ・平戸市が昭和30年に1市6村の合併を行うのに前後して、中野観光協会が作られた。旧中野村の川内は中世時代に明の商船の泊地があって大層賑わっていたという。有名な長崎の丸山遊女の「丸山」の語源は、川内の丸山の遊廓街からきているほどである。
- ・そういう歴史があるから、中野村では全市の観光協会の事業とは別に、地域の歴史を勉強する人が少数ながらいた。今でも公民館で地域の観光解説のボランティアの人達を中心に歴史の勉強などが盛んに行われている。
- ・日本では鄭成功の名前すら知らない人も多いかもしれないが、台湾では今なお英雄であり、孫文、蒋介石とならぶ「三人の国神」として崇拝されている。また、台湾城内に明延平郡王祠として祀られ、毎年4月29日復台記念式典が催されている。
- ・台湾では媽祖神（中国民俗信仰の一つで航海安全の守護神、今では万能神として敬われている）の参詣者が大勢いる。台湾全土に媽祖神を祀る「媽祖廟」が1,000箇所もある。そのうちの2箇所から、平成9年4月に媽祖神が分霊され、川内町観音堂に安置されている。平戸の鄭成功廟を再建しようと台湾の「媽祖廟」に呼びかければ、すぐにみんなが参加しそうな雰囲気もある。
- ・中野観光協会は、「鄭氏宗親会」の活動の平戸での世話役を行っている。「鄭氏宗親会」は文字どおり鄭成功と媽祖の神の熱心な支持者たちのネットワークで、全世界で約1,000万人もの人で成り立っている。常時連絡を取り合える人も世界中で約140万人くらいいるといわれる。経済活動にも



鄭成功復台336周年記念式典の一コマ
出典：「延平郡王祠の祭典と神道」



台湾で行われた祭典は地元紙に大きくとりあげられた

関係する多国籍のネットワーク活動でもある。

- ・台湾では、鄭成功の母親の里である平戸に、一度は行ってみたいという人が大勢いる。会の人にとっても平戸は特別な場所という扱いである。毎年7月13～14日にかけて、台湾から平戸に40～50人くらいやってきて、鄭成功廟で鄭成功生誕祭を行っている。どういうわけか日本のエージェントは、そういう特殊なテーマをもつツアーをなかなか受け合ってくれない。行政のサポートも国交がないだけにやりにくいといわれる。
- ・一方、台湾で行われている鄭成功を祭る行事には、石田さんをはじめとする中野観光協会からも毎年出席している。
- ・以前、平戸のこうした活動を支援してくれる大学の先生もいて、平戸で国際学会を開いたこともある。その時の経緯からみても、台湾との交流などは、平戸市の全市での交流を広げていくのが本来

だとも思うが、観光都市としてこれだけのネットワークをまだ生かし切れていない。

- ・これからの平戸の地域づきあいはアジア全域へということの中野観光協会では考えている。台湾だけでなく、海でつながった近所の国同士の関係を結べば地域にとってもプラスになるという考えである。

観光は本来相互産業。地域間の付き合いの中でマーケティングを広げていくべき

お話をうかがってみて、地理的条件からみて有力なマーケットのない地域にとって、ママで細々と繋いでいくパーソナルなネットワークが最も重要と思われた。

平戸の場合、中野観光協会の活動は、大都市が大々的に行うコンベンション活動に比べれば、はるかに地味でお金もかからないのであるが、その中味は濃い。

石田さんはいかにも楽しそうに活動しておられるが、こうした日常的な交流活動の結果、台湾と平戸という数世紀前の地域間交流が今なお続いている状況を見て、人や歴史やつながりの偉大さを感じさせられる。

石田さんの話では、「鄭氏宗親会」を通じて台湾で出会う人たちの中には、60歳を過ぎた人もいて、幼年期を日本の統治時代に過ごした人も多いという。ある意味で今の日本に住む我々よりも、ずっと多く日本人が本来持っていた美德というものを身につけており、昨今の日本人の政治・経済・教育などの情勢をみるにつけ、本気で日本の行く末を心配してくれる人が大勢いるという。

石田さんは「観光は本来、地域間の相互関係として成り立つものではないですか」と言う。平戸を通じて、こちら台湾を知り、反対に今の日本を真剣に見てもらう。こうした地域間の人の係わりなしで、一方的に客引きにのっかって、呼びこむだけという鼻息の荒い観光のあり方ではもはや成り立たないように思う。（NO.39 1999.3）

平戸川内の鄭成功祭に出て

よかネットNO41 1999.9

NO.39で長崎県平戸市で活動続ける中野観光協会のことを紹介した。合併前の旧村にある観光協会が、平戸と台湾を結ぶ役割を果たしている。

平戸は東洋が産んだ中世の英雄・鄭成功（ていせいこう）の出生地で、世界にひろがる「鄭氏宗親会」（鄭成功を慕う人々のネットワーク）など、台湾を中心にこの地に親しみをもつ人が多い。

台湾から鄭成功を慕って遠路はるばる平戸まで

「今年は例年よりも人が多いようです」と7月上旬に電話したとき、平戸の川内郵便局長の石田康臣さんはいう。石田さんは中野観光協会で「鄭氏宗親会」の平戸側の中心的な役割をつとめている。毎年夏「鄭氏宗親会」のメンバーが40～50人も平戸に訪れて、鄭成功祭が開催されるのだが、今年は7月13～14日の2日間に予定されている。そこで、私たちもぜひその中に混ぜてみたいと、石田さんをお願いしたのだ。

今回の鄭成功祭では、前夜祭として台湾からのお客さんと中野観光協会など平戸の人々の歓交に加え、松浦地方を舞台に海を駆け回った男達を描いた小説『怒濤のごとく』で第33回吉川英治文学賞を受賞された作家・白石一郎さんの祝賀も行われるという。

蘭風が、今夜は台風には？

7月13日の夕方、前夜祭会場とお客さんの宿泊先を兼ねている平戸のホテル「蘭風」に入った。このホテルが面している浜辺には、鄭成功が出生した場所と伝えられる児誕石があり、さらに、ここから海岸線を辿る道路を車で5分ほど行くと、鄭成功廟がある川内集落がある。翌日はこの廟で式典が開かれる。

ホテルのロビーでは、既に台湾のお国言葉が飛び交っている。ホテルの名前は蘭風なのだが、お客さ

んは台湾からの人々。夕方の6時半から130名（台湾から60名、平戸側から70名）の参加で前夜祭は盛大に始まった。平戸市からは市長、助役、商工会議所の会頭なども出席されていたようだ。

少し下世話に考えると、毎年50名ほどの遠路はるばるの来訪者が、観光都市・平戸市に与える影響は金額としてはそれほど大きくないかもしれない。仮に宿泊と食事、買い物を含しても平戸に実際に落ちる消費額は1人1万円以内かもしれない。しかし、16世紀の出来事が今の時代に通じて、台湾と平戸という離れた距離を実際に人が足を運んでいる様子を実際にみていると、結局ベースになっているのは、国を超えた人づきあいであり、地域の歴史と誇りを大事にする中野観光協会の人々の日常の活動である。

集落でコンベンションビューローをやっている。無理と無駄のない普段着のおもてなし

翌14日、朝から鄭成功祭が行われる廟のある川内浦を見渡す丘に行った。既に昨日の前夜祭から、もてなす側とお客さんのすっきり和んだ雰囲気もあった。辺りには線香の煙が漂っている。受付でもらった鄭成功祭の次第は以下の通りである。

1. 着席 2. 開式 3. 神事（修抜、降神、拝礼、献撰、祝詞奏上など）4. 祭主挨拶 5. 感謝状贈呈 6. 台湾賞の贈呈 7. 挨拶（平戸市長、台湾訪日団、白石一郎さんなど）8. ご対面（鄭成功子孫・鄭萬進さん、鄭成功の弟七左衛門の子孫・横浜市在住の福住邦夫さんほか）9. 奉納（中野自安和楽奉納）10. 閉会

これが朝10時から約1時間半かけて行われた。

受付では、石田さんが普段勤めている川内郵便局の若い女の子が、仕事の手が空いたのか、お手伝いをしている。また会場には臨時のテントが張られ、中野観光協会の婦人部が茶菓子の用意をしている。石田さんをはじめ観光協会のメンバーは昨夜から相変わらず忙しい。さながら集落全体が



鄭成功祭の始まる前の風景

手弁当でコンベンションビューローをやっているみたいだ。来ている台湾のお客さんもリラックスし、雰囲気はちょうど「お遍路さん」のような感じ。イベント志向ではなく、新聞に出さずればそれで満足という薄っぺらなものでもない。参加する人たちの想いだけで支えているような集まりだった。

なお余談だが、平戸を訪れた台湾のお客さんの今回の旅行スケジュールを、後日、石田さんに聞いてあらためて驚いた。

一日目：台湾（桃園） 那覇（空路）
二日目：那覇 福岡 佐賀 平戸（空路＋陸路）
三日目：平戸 門司 瀬戸内海（陸路＋海路）
四日目：瀬戸内海 大阪 札幌（海路＋空路）
五日目：札幌 層雲峡（陸路）
六日目：層雲峡 網走 摩周湖 阿寒湖（陸路）
七日目：阿寒湖 千歳 東京（陸路＋空路）
八日目：東京 台湾（空路）

海外では移動ばかり・・・と言われる日本人からみても、かなり強烈な日程の列島縦断ツアーである。台湾の人々のパワーをかいま見るような思いである。それでも旅行のタイトルは『台北市鄭氏宗親会第十八回日本平戸親善訪問団』であり、その中でもメインはやはり平戸ということになっている。

海による結びつきを辿れば、九州は「お話の宝庫」だ。平戸をはじめとする長崎県北部から、県境を挟む佐賀県北西部までの広域な松浦地域は、今は陸上交通で延々と海沿いを通して移動する不便な地域である。この辺りの島々に行って土地の人に話を聞いていると、つい100～200年前の出来事でさえ、すでに地元では伝説的な記憶としてしか伝承されていないものもある。例えば、生月島の資料館でみた古式捕鯨や、土着化して今なお伝える人もいるキリスト教

信仰のことなどを知ったとき、それだけで得た気分になれたのだが、後で聞くと地元では資料館が一番の資料集積ということになっていて、あくまでモノとしての展示が中心である。

平戸の中野観光協会の取り組みをみていると、海での移動が結びついてきた時代の、この地域に由来した「お話」のルーツをたどっていけば、地域間の交流をベースにした、地域で行う学会活動のひとつでも出来そうである。

今や土地固有の楽しみ、おもしろい話、おいしい食べ物が、人に注目される土地の要素となっていることを考えると、平戸はいろんな要素があり、お話が出来そうだ。 (NO.41 1999.9)